

平成 27 年 3 月 23 日
静岡市・あざれあロビーにて

座談会
～原発県民投票を振り返って～

出席者

鈴木望(元原発県民投票静岡 共同代表、前衆議院議員)
佐久間章孔(元原発県民投票静岡 共同代表、ネットワーク県民投票代表)
中村英一(元原発県民投票静岡 事務局次長、原発県民投票 2015 代表)
久保田誠司(元原発県民投票静岡 受任者、原発県民投票 2015 事務局長)

鈴木望：原発県民投票を総括する場合に、大きく二つに分かれると思います。一つは、県民投票の実施を求めて署名活動をしていた期間。もう一つは、その結果を受けて県議会で成立させようと活動した期間ですね。前者の段階においては、所期の目的を達したが、後者の段階においては所期の目的を達成できませんでした。それぞれについてどうしてなのか？ということ、考えることが次に繋がると思います。

まず、どうしてこの運動を始めたのか。そして実際に署名を集める段階において、どんな問題があったのか。人・モノ・カネなどはどうだったのかなど、後の参考にすべきかと思います。

佐久間：そうですね。それから否決された後も続きがありまして、後継団体のネットワーク県民投票が 2 期、3 期と重ねて、現在は私が代表を務めています。この間に、知事と議会に働きかけをやっていきます。知事の方は「県民投票について、やはり県民の意見は聴くべきである」という発言をされています。

また去年の 6 月に、「原発エネルギー総合対策議員連盟(原発議連)」の方からネットワーク県民投票が呼ばれて、代表として私が意見を陳述しました。これは原発に中立な市民団体という立場でして、反対派としては牧之原市の行政関係者が呼ばれたと思います。その後の県庁での記者会見で、議連の天野一会長が「統一地方選の前に結論は出さず、選挙後に委ねたい。県民投票については新メンバーで再検討する」という意向を示しました。

こうした知事と議連の態度は、一度議会で否決した議案に対するものとしては、極めて異例だと思います。そういう意味では、後継団体の粘りを評価していただいていた方がいいかと思います。

鈴木望：いろんなところに影響を与える効果があったと思いますね。

佐久間：また「原発県民投票 2015」の皆さんが、一人一人の県議さんと呼んで対話するという活動を継続されていることもあります。そうした、今までいろいろやってきたことが、成果として変化をもたらしたと思います。これがそのまま県民投票の実現に結びつくかということ、そんなに簡単ではないですが、皆さんよく頑張ってきたと思います。

<前半戦について>

久保田：そうですね。それでは運動の初めから振り返ってお話いただけませんか。

鈴木望：最初、私は二つの目的を持って、この運動に関わってきました。一つは直接請求という形での直接民主主義ですね。私自身はこの運動の前に、名古屋で住民投票を求める運動の代表をした経験がありました。やはり非常に重要なことについては、間接民主制を補完する機能としての直接民主制によって、住民の意見を聴くべきではないかと考えます。そうしたものとして、浜岡原発の問題については、住民投票で決めるべきではないかと考えたわけです。

もう一つは、私は浜岡原発はやめるべきではないかと考えていました。しかし、どうも議会制民主主義の中では利益団体の圧力が強くて、思うように言いにくい雰囲気がある。だったら直接民主制でやったらどうかと。こうした二つの目的がありました。そういう意味では、この運動全体としては結果として、直接民主主義の影が薄くなって、原発をどうするかというところに重点がかかってしまったとは思いますが、私自身はあくまでも二つの目的で関わっていきこうとしました。

その直接の契機は、原発について住民投票で決着をつけましょうという全国的な運動の中で、今井さんという運動のリーダーの方と名古屋で知り合い、2011年の11月に東京で開かれた会に一参加者として行った際に、佐久間さんと出会ったのですね。佐久間さんは独特な直感でもって、静岡でも住民投票をやるべきだと、いち早く宣言された。それで、佐久間さんをお手伝いしたらどうかと、私も今井さんから言われたのですね。

ただし、結果がみじめなモノになったら、かえって目的を汚すようなことになる。私も市長として、一つの組織を動かす立場にいた者ですから、そのあたりは考えないといけないと思いました。

その時、佐久間さんが原発反対の方々との、ある程度のネットワークがあると聞きました。私の方は原発問題に関心の無かった人達やお金を集めるとか、全体的に運動を動かしていくということには、少しは経験があると思っていましたので、二人でやるのだったら、成功はしなくても、大失敗はしないだろうと思ひ、一緒にやりますかということになったのですね(笑)。そして、2011年の12月に静岡市の喫茶店で最初の集まりを持ちました。

佐久間：今のお話のように、原発国民投票運動の場で鈴木さんとの出会いが最初にありました。鈴木さんは磐田市長を三期なされ、その当時は静岡産業大学教授という立場だったことから考えて、鈴木さんお一人に代表になっていただいて、私は事務局次長くらいでお支えすると提案しました。しかし、静岡での言い出しっぺの私を差し置いて、一人で代表をやるのは嫌なので一緒にやろうと、鈴木さんが言って下さいました。キャリアとか、信用面からすると、鈴木さんが単独で代表をなさった方が座りがいいのですが、たとえ社交辞令でも、あの場面でそういう言葉が出るというのは、とても信頼できる方だと思いました。そして、共同代表になったのですが、あくまでもお支えするという気持ちでした。

鈴木望：私の気持ちはさっき言った通りで、未知の部分も多かったですからね。

佐久間：無党派や保守、中道にいかにかねるか。これが一つの大きなテーマで、そちらの方から署名がたくさん集まらないと、議会の賛同を得ることは難しい。しかし、反対派の人達の中にも、3.11以降は若い人達が入ってきていましたから、そちらの方への目配りや調整などに苦労したことは覚えています。

鈴木望：最初に静岡市の喫茶店に、10名くらいの方が集まったのですが、その人たちが中核的なメンバーとして最後まで活動してくれました。印象的だったのは、佐久間さんと静岡市の成澤さんというお寺の御住職に話に行った時のこと。こういう人が一生懸命にやってくれたら、運動の輪は広がるなと感じたことを、今でも記憶しています。

その他にいろんな人脈から、事務局長の勝見さんや事務局次長の中村さんといった実務を担う人も紹介していただいて、これなら何とかなるかと思いましたが。そして、既存の左翼系の団体や原発反対運動をしてこられた方々は佐久間さんが、保守系の方は私が何とかするという形で役割分担して動き出したのですが、佐久間さんが倒れたことは衝撃でした。

佐久間：3月21日、署名活動を始める前に脳卒中で倒れてしまいました。

鈴木望：佐久間さんのお体も心配だったのですが、左翼系や反原発の団体。その窓口が佐久間さんだったので、佐久間さん不在でやっていけるのかなあと、正直不安に思いました。そうした団体は原発には反対だけれども、佐久間さんと一緒に伺った時には、県民投票には熱心な関心は示してくれなかったのですね。自分たちの運動がまずあって、その運動の方を優先するという雰囲気の色濃く感じられました。佐久間さんみたいに「それでも協力してくれよ」と頼める人がいないと、なかなか組織は動いてくれないという現実があった。その時に、場合によってはそうした組織は動いてくれなくてもいい。自分たちの力で取り組もう。それ位ホゾを固めてやりましょうと、初期のメンバーみんなと相談して決めたのですね。

そして、そうした組織の中から個人的に動いてくれた方もいましたが、組織としては動かなかった。その結果、組織に頼らずというところが前面に出て、マスコミも純粋なボランティア活動と受け取ってくれて、結果としては良かったと思います。

ただ一つ閉口したのが、同じ時期に共産党系の皆さんが原発反対の署名活動をしていたのですね。それで、場所取りの話とかいろいろ問題が出てきました。「もう署名したよ」と言う人がいて、聞いてみると向こうの署名だったとか、紛らわしくなった部分もありました。我々の方は法的拘束力があって、一定期間内に集めないといけないので、この期間だけは遠慮してもらいたいと思いましたが、なかなか上手くいかなかったですね。

佐久間：私が倒れたことが原因の一つかなと思っています。期間中は遠慮してくれというようなことは話していたのですが、「原発県民投票静岡」という団体との話ではなく、佐久間個人との約束と考えたようです。大きな目的においては変わらない、と考えてくれれば良いのですがね。

鈴木望：そうした面での、既存の組織との付き合い方の難しさは感じましたね。

久保田：2011年の12月1日に最初の集まりがあって、それから2012年の2月中旬にはメディアも招

いた集会があって、そこで署名活動を始めると発表されました。その時は、まだ全く人に知られていないし、資金面にも不安があるし、時期が早いのではないか。署名期間は2ヶ月間と制限があるので、しっかり準備してからでないかと失敗するのではないかと、という意見も出ました。私も、署名集めは期間の制限がありますが、受任者集めについては期間の制限がないので、まずは受任者集めをやって、ある程度の人が集まってからやるべきではないかと思っていました。その点についてはいかがでしょうか？

鈴木望：それについては「鉄は熱いうちに打て」と言いますし、早くやらなきゃと思いました。

久保田：それは3.11から間を置かないということですか。

鈴木望：それもありますし、やると決めてから行動するまでの期間があまり長いと、必ず意見の相違が出て、勢いが削がれると思いました。慎重論、ネガティブな意見に支配されると、「やっぱり、やめまいか」ということにもなりかねない。「鉄は熱いうちに打て」というのはいろんな運動に関わってきて、一つの鉄則だと思っていました。どんどん進めていくことで、勢いがつけば、人も物も金も集まってくる。長引けば長引くほど、失敗の可能性が高まるというのは、経験則から分かっていたから、代表をやらせて頂いた以上、早くやりたいと思いました。そこは、佐久間さんとも一致しました。

佐久間：やはり受任者を集めるにも、旗を揚げないと集まらない。「いつ」と期限が決まらないと集まって来ない。

鈴木望：それと大阪市民投票や東京都民投票の動きが先にあって、ノウハウもある程度あった。私自身も名古屋で経験していましたから。いろんな方が、善意から心配してくれているのは分かりましたが、むしろ勢いがある内に始めた方がいいと思いました。結果論から言うと、早く始めて良かったと思います。

久保田：大阪市民投票は私も注目していたのですが、署名がスタートしてからも全く数が伸びない。このままでは法定署名数にも届かないのではないかと心配し、正月休みを使って2泊3日で応援に行きました。スーパーで署名活動したのですが、都会の厳しさと署名が取りにくいなど、貴重な経験をしました。振り返ると静岡の方がずっとやりやすかった。

大阪は何とか法定署名数クリアした状況だったので、静岡では同じ轍を踏まないかと心配したのですが、結果的に私の読みは外れて、お二人のおっしゃるように早くスタートして良かったのですね。

鈴木望：私も大阪に行って感じたのは、原発の立地地域でもない大阪市でやることに、市民の間でしっくりきてなかったですよ。そういう意味では静岡は浜岡原発があって、リアリティーがあるので、もっとうまくいくと思っていました。署名が始まるまでの間に、東・中・西で一応の拠点ができしたのは大きかったと思います。

東部の近藤さんや古長谷さん、中部の成澤さんや宮澤さん、西部の鈴木敬三さんや鈴木恵さん

といったように、地域で主体的に中心になる人がいて、署名の仕方も、街頭でやったり、個別訪問を中心にしたりと地域でいろんな工夫がされました。

久保田：お世辞で言うのではないですが、代表が前磐田市長というのは大きかったようですね。

佐久間：大きいです。私は始めから、トップは保守の人じゃないと駄目だと思っていました。静岡空港での県民投票を求める活動のような形だと、どれだけ署名が集まろうと議会には相手にされないうで終わってしまいますからね。

鈴木望：印象に残っているのは、伊豆に行った時ですが、商店のおかみさん達が伊豆の観光事業を守るためだと一緒に回ってくれて、とても嬉しかったです。

久保田：この問題はほっとけないと思って、動いてくれる人がたくさんいるのだと感じました。それと、「街かどステーション」という、各地域の中で小さな拠点を作っていく仕組み。あれが段々と増えてくると、「あそこにも頼めないかな」という形で、自然と広がりが加速していったのだと思います。

鈴木望：それぞれの地域の核となる人たちが、そうした形で新たに参加してくれてありがたかったです。

佐久間：そういう人たちの中には、学生さんとか、とても若い人もいましたね。

久保田：いざ署名活動が始まって、いきなりトラブルがありましたね。署名簿は受任者用と請求代表者用と二種類あって、受任者用は自分の住まいの市町の人からだけ、請求代表者用は県内どこにお住いの人からでも署名を頂ける。ただし、請求代表者用でも市町ごとに用紙を揃えないといけない、という制限があります。それが伝わっていない所があって、せっかく書いてもらった署名を無駄にしてしまった、ということもありました。

鈴木望：署名簿を市町ごとに分けられないといけないというのは、署名簿を審査する向こうの側の都合なのですね。それで貴重な住民の意思が無効になるのはおかしいと思います。

久保田：署名簿を各市町の選管が確認するので、分けて提出しないと作業ができないということだと思いますが、大変面倒なところでした。

鈴木望：根本には直接民主制の形だけはあるのだけれど、なるべく使えないようにという意思があるのじゃないかと感じました。特に地方自治においては、もっと直接民主制を機能させるよう、できるだけ不便な制約は取り除いていくべきだと強く思います。

佐久間：政治への関心の低下は低投票率にも表れており、間接民主制の限界が見えてきているように感じます。直接民主制を取り入れないと、みんなが納得して行政についていくことができなくな

ります。

久保田：やはり議員の方は、選挙で選ばれたということで、俺らに任せておけという意識が強いのでしょうか。

鈴木望：そういう意識なのでしょうが、議員のレベルと住民のレベルは100年前と違って、任せておけという時代ではないですね。住民が手に入れる情報量も多くなりましたし、やる気とか知識とかは議員の方が上かもしれませんが、選挙でいったん選ばれたら、全て議員が決めるというのは、間違いだと思います。

署名活動の予想外の成功というのは、浜岡原発を心配されている方々がたくさんいる。それに対して政治の方が根源的な応えをしていないと感じている方々が、本当にたくさんいたということだと思います。

佐久間：広範囲な人々の署名が、既存の組織もなく集まったことは、ある種の驚きと共に評価されています。今後、住民投票が実現するかどうかに関わらず、我々のやったことの意義は大きかったと思います。

鈴木望：この活動には若い人達もけっこう関心を持って参加してくれました。今、18歳投票年齢への法改正が言われていますが、条例案で年齢を18歳としたことも先駆的だったかなと。

佐久間：若い人の直接民主制への関心の高さは、代議制間接民主制への無関心とウラハラなのですね。結局、立候補している人の顔ぶれを見ても、自分の意見を代弁してくれそうな人が少ないと。そうした思いがあるのだと思います。

久保田：なるほど、ウラハラなのですね。今、これだけ投票率が低いので、もし県民投票をすることになっても、どうせ低いのではないかと言う人もいました。しかし、住民投票の場合は普通の選挙で投票する時と違って、浜岡原発の再稼働について明確に自分の意思を表明できる機会ですから、棄権してしまう人は少ないのではないのでしょうか。私は80%位いくのではないかと思いますね。

佐久間：少なくとも、今度の統一地方選のようなことはないと思います。

鈴木望：住民投票というのは、確かに濫用はいけないと思います。例えば、図書館建設などを考えた場合、それは「いい」という人が一般的には多いと思います。ただ、財源がどうなのかなど、その辺りのことも考えないといけない。だから、図書館建設のような問題には、住民投票はふさわしくない。何でも住民投票でいいという訳ではないと思います。そこで、原発のような問題こそ、ふさわしいと思います。ふさわしい問題を住民投票の対象にしようという運動の意図は、素直に県民に伝わったと思います。

<後半戦について>

久保田：それでは、署名活動が終わってからのことについてお話しいただけますか。

鈴木望：これだけの署名が集まったということで、マスコミも相当注目してくれて、一挙手一投足を報道してくれるという状況がありました。知事は署名数が出るまでは、あまり積極的に評価されていないと感じていましたが、真正面から受け止めるという風に変わったと思います。知事にしろ、県議にしろ、県民の支持を得ないといけないという思いがあったと思います。それは、立場上当然のことなんですよね。

そして、前半戦は純粋な思いを持った人たちとのボランティア活動で盛り上がり、後半戦は様々な思惑を持った人たちと駆け引きをしなくちゃいけない。そういう意味では、後半戦についてはあまりにも準備不足だったと思います。

久保田：署名を集めることがゴールという感覚があって、その後どうするのだという視点があまりなかった。それで、東京都民投票でロビー活動をされた方をお呼びして、勉強会を開きました。そのことを鈴木代表に報告した時、あまり先走ったことをしてくれるなど言われました。それは、大阪であったような「議員を評価する」みたいな活動につながったら、かえってマイナスになると心配されたのですよね。

鈴木望：そこの所は、やめてもらいたいと思いましたね。私が市長をやらせてもらった経験からしても、やはり議員にどのように対応するかということについては、簡単ではないですよ。東京や大阪の一部であったような、「議員を評価する」というような活動をする、表面上はいいことを言ってくれるかもしれませんが、結局は否決されてしまう。

ただ私自身の反省ですけれど、議会に対してどういう対応すべきかについて、はっきり言って準備不足でした。その部分については、代表として自分の責務を遂行できたという思いは無いですね。

次に同じようなことをやるとなれば、「住民投票をやるべきだという署名数が法定数を大きく上回ったら、条例案に賛成してくれますか。それとも反対されますか」というような、事前の交渉を県議さんに対してやっておくべきだと思います。

久保田：事前というところのタイミングで？

鈴木望：署名活動を始める前です。今回は、署名簿を提出してから、各会派をぐるぐる回りました。マスコミがいたので粗略な対応はされなかったのですが、「県政については俺たちが決めるのだ」という顔を露骨にする方もいました。

それと、肯定的に評価してくれていると思っていた知事が「条例案に不備がある。代表は謝罪すべきだ」というような言い方をされて、非常に遺憾に思いました。中村さんが4月の段階から県の担当者と打ち合わせし、こういうもので良いとすり合せをしていました。そもそも条例案というのはそのまま議会で可決して通用する程の完成度は要求されていないのですよね。理念や大まかな方向性あって、こういう内容について条例案を制定するための署名活動を行う、ということが明確であれば、テニオハがどうか、投票年齢18歳の問題とか、条例制定後6か月以内に実

施は難しいとか、提出後に直せばいいだけの話なのですね。条例案自体も、大阪や東京の条例案とほとんど違いはなかったのですが、「不備がある」と県当局によって問題とされたのは静岡だけなのですね。だから、この点では静岡の例は、非常識な例になっていると思いますね。

久保田：知事が県民の支持を得るために賛成したということ自体は、普通のことのようには思います。署名が集まる前の段階でのどちらかと言うと否定的な見解から、署名が集まって、これだけ県民がやりたいと言うのだったら賛成に回るというのは、ある意味当然ではないですか。

鈴木望：それは問題ないですが、知事自身は浜岡原発についてどう考えているのか、県民投票をすることがいいのかどうか。そういうことについて考えを持っているべきだと思います。

久保田：議会への対応については、署名を出した後にみんなどうするのだと心配していました。それで集会を開きましたよね。あの時にいろんな意見が出ましたが、最終的には鈴木代表が「駆け引きの上手い人達に対して、小手先でどうのこうのと考えても仕方がない。真正面からやっていこう」と言われ、それでまとまりました。

鈴木望：窮余の一策ですよ。下手な策を弄したら、必ず足をすくわれるだけだから、正攻法でいこうと。ある意味、敗色濃厚だなども感じていて、どうせ敗れる可能性が高いのだったら、正々堂々真正面から行ってやろうと思いました。

久保田：なるほど。しかし、普通の受任者としては、具体的に何をやったらいいのか、よく分からないということもありました。その時に富士宮では早い段階で、県議と対話する会のような催しを企画していて、自民の県議からも民主の県議からも出席の承諾を得ていました。

それで、これを各地でやりましょうという話になって、静岡市では葵区と駿河区と合同でやって、清水区もやりました。実はそういう催しを実施できたところは、修正案に対して賛成に回ってくれた県議の方々が多かったと思います。あるいは、もともと賛成してくれる方だから、来てくれたということかもしれません。

鈴木望：そういうことを最初の段階から考えて、手を打っておくことは必要でした。それについては全国レベルであまりいい例がなかったのですが、無策すぎたと思いますし、大きな反省材料ですね。

私は静岡市での両方のイベントに出ましたが、ああいう話し合いの場で、議員の方に発言してもらって本当に大事なことだと思います。浜松ではやろうとして、拒否されてしまったのですが、いかにも市民運動的な形で話を持って行ったものだから、拒否されてしまった。もう少し、「一緒に考えましょう」とこちらから頭を下げて丁寧に行っていたら、違っていたのではないかと思います。

佐久間：そもそも直接請求という案件は、議会の多数の賛成を得ないとダメなのですね。そういう意味では、陳情案件と変わらない。陳情案件であるならば、議席第一党から、こういうことをやりますよと根回ししていく。了承を取れなくても、少なくとも挨拶なしにやったという形にならな

いようにしておく必要はあったと思います。そのあたりは、私自身も甘かったと思います。

議会の方々には思惑やメンツもありますから、そうした思惑を外したり、メンツを潰したりしてはいけません。もっと人懐っこく飛び込んで行って、お話をしておく必要はあったと思います。これは代表を引き受けた段階からやらなきゃいけなかったと、私も反省しています。

ですから今後の教訓として、議会の多数の賛成を得ないといけないという意味では、陳情案件なのだという意識をもった方がいいと思いますね。その陳情を実現するために、署名を集めるのであって、県の当局に対しても、各党派に対しても、「市民の言うことを聞け」みたいな態度で行っちゃ絶対ダメだと思います。

鈴木望：そういう意味では、数としては十分な署名が集まったのですが、それを有効に活かしきれなかったですね。

佐久間：日本では、直接請求運動に限らず、そういう方面の知見と経験が欠けているところがあると思いますね。やっぱり数の力に頼ってしまうという感じが強いですね。

鈴木望：確かに議員のメンツも潰さず、思惑も上手く取り込みながら、やるべきだったなと思いますね。事前の挨拶に行くのもそうですが、条例案についても各党派に事前に説明に行くべきでした。

中村：私は「原発県民投票 2015」というグループで、昨年から「県議と対話する会を」を続けてきて思うのですが、こうした場をあの時に持つべきだったと。でも、あの時はそういう発想がなかった。確か活動がスタートした時に、各県議には挨拶状を持って行ったと思いますが、それは単に書類を持って行っただけでした。キチンと挨拶をするという意識を欠いていたというのは、残念ながら事実だと思います。「数を集めたら何とかなる」みたいに安易に考えていて、本気で考えていなかった。

鈴木望：当時は署名がちゃんと集まるか、それも東部・中部・西部と、すべての所でバランス良く集まるかとか。そこらあたりのことで頭が一杯で、その後のことには意識が回っていませんでしたね。

久保田：そのあたりのことは反省すべきだけれども、あの状況の中ではやむを得なかったとも思いますね。

鈴木望：そうですね。やむを得なかった部分も相当多かったと思います。ただし、今度やる時は考えないといけないですね。

佐久間：3.11後の状況から来る「これをやるのが正義だ」みたいな気持ちだが、多くの人にあったことも事実で、「数が集まれば通るはずだ」みたいな思い込みが、一部にあったのも事実でしたが、そう簡単な事ではないですね。

鈴木望：原発問題というのは現実のエネルギー問題で、善意・悪意に関わらず既得権がある。原発で

働いているというのも一つの既得権。そういう諸々の複雑な要素の上に、条例を成立に持っていくことの難しさがあります。これは、署名を集めることの難しさとは別にあります。ただし、電力会社などの既得権のある方からは、署名は集まらないと思われたのか、集まっても否決されるだろうと思われたのか、ともかく妨害とかは無かったですね。

久保田：一部の労働組合からは、何かあったように聞きましたが。

中村：マスコミ報道では、一部の議員さんにはあったようですが、私たちには無かったですよね。

鈴木望：そして、県議会で最終的に5人のメンバーで意見陳述を行いました。みんなそれぞれの想いを述べていて、問題はなかったと思います。

久保田：ある県議の方が、意見陳述の後にご自身のブログで「今回の原発反対の署名活動については・・・」と表現されていました。私たちとしては「中立」の立場でやってきたのに、その方からすると反対運動に見えたのでしょうか。そういうことを考えると、再稼動に賛成の立場からの意見陳述があっても良かったという気もするのですが、いかがでしょうか。

鈴木望：確かに、そういう意見も出していたら、もう少し支持を上げられたかもしれません。あくまでも「中立」という建前を貫くかどうかということで、私も悩みました。私自身としては、「浜岡原発は絶対やめてもらいたい」と思ってやっていた訳で、建前に自分の発言まで縛られてしまうという心理的な圧迫感は、県議会や委員会で見聞した際には大きかったですね。

佐久間：我々が「中立」の市民団体だという建前を必要としているのは、実は議会の方かもしれません。あるいは県の行政もそうかもしれない。中立系の市民団体ならば、議会も行政も意見を聞きやすい、というのは事実だと思います。そうした意味で、建前は建前で貫いた所が、巻町の住民投票が成功した理由かもしれません。

鈴木望：それはあるかもしれませんね。

中村：そこは重要な所だと思います。個々の思いと、会としての理念は別。これは当然の事であって、「会の理念としては中立としてやっているのだから、個々の思いとは別に考える」というのは、当然のことだと思います。その意味で言うと、県議会での意見陳述をする時に、原発反対を強く出すのもまずいし、その一方で賛成のふりをするみたいなことも、ダメ。

あくまでも会としての理念にのっとりつつ上で、自分の思いをキチンと言わないといけない。すごく難しい面がありましたが、自分としてはそういうものとして、意見を述べたつもりでした。しかし、残念ながら全体としては、反原発という色が出過ぎたという感じはあったと思います。そこを工夫していたら、結果は違ったという事は、もちろんないと思います。ただ、個々の思いと会の理念は別だということをハッキリさせて、運動を広げていく事は、日本ではまだ難しい。それが、私たちの運動が後半に入ってから抱えた、大きな問題だったと思います。

鈴木望：それは私自身にとっても、すごい大きな問題でした。私も代表である以上は、原発反対ではなく、中立の立場でやっていかなければと思っていました。そうした中で、「浜岡原発は廃炉にすべきだ」と発言したら、「代表がそうした発言をするのはおかしい。代表をやめるべきだ」と言われたりしました。本音と建前で引き裂かれるような感じで、そのフラストレーションはすごかったです。そのフラストレーションが無ければ、その後に国会議員に立候補したりしなかったですね。条例案が否決されたのを受けて、私は代表をやめる。この運動から一線を引いて、政治の場でハッキリと自分の思いを言っていこうと思ったのです。

それはそれとして、今後もう一度住民投票を求める活動をやるのだったら、会の理念については、少なくとも中心メンバーはしっかりと意思統一しておく必要はありますね。

久保田：少し話が戻るかもしれませんが、スーパーの敷地内での署名活動についてです。複数のスーパーから許可を頂いて、署名活動を行う事が出来ました。そして、多くの署名を集めることが出来たと思います。この運動は、中立の立場でやっているというところを理解していただいて、OKをもらえたという事でした。やはり、いろいろな個々の思いとは別に、会としての理念がしっかりしているということは大切だと思います。

鈴木望：中立という理念があったから、いくつものスーパーから許可を頂けたのですね。

佐久間：立場上、「中立だ」と言ってもらわないと困る人もいますからね。

鈴木望：我々もいろいろあったけれど、結果として中立を貫けたから、良かったのではないですか。けれど、「本音はどうするのだ」という所の意思疎通は、もう少ししっかりやっておかなきゃならなかった。建前と本音が、今の日本社会ではゴチャゴチャにされてしまいますからね。

中村：「原発に賛成の人も反対の人も、県民投票によって、自分たちの意思を明らかにしよう」という、会の理念は正しかったと思います。それがあったから、私の地元の田舎のスーパーからでも、許可を頂けたのだと思います。確認はしていませんが、スーパーの敷地の中まで入って署名活動がやれたというのは、東京でも大阪でも新潟でも無かったのではないのでしょうか。

そして署名の獲得率も、静岡が一番高くなっています。それは、知人や友人に直接声をかけてお願いする。知らない家にも入って行って署名をお願いする。そうした、地道な活動を多くの受任者さんたちが積み上げられたからだと思うのです。函南町や菊川市や富士宮市などが典型ですけど、そうした地道な活動の上で、スーパーの中まで使わせてもらって署名を集めた。それが、高い獲得率に表れたと思うのです。

鈴木望：街頭も重要なのですが、街頭で見かけた上で、自宅に訪ねて来られると、「それじゃあ」って事になる。突然知らない人に自宅に来られても、信用できないってこともありますし、街頭と戸別訪問という二つが重なる事での相乗効果はありましたね。

久保田：そして最後に、否決された後に世論調査をやったと思いますが、それはどのような意図で行ったのですか。

中村：「県民投票は否決」というのが、議会としての結論ですよね。その結論が、「本当に県民の意思を反映しているのですか？」と問いたかった。「県民の意思」は、客観的にはこうだよと明確に表現してみたかった。県議会は否決したが、県民はどう思っているのか。そこを明らかにするために、専門の調査会社に依頼して、アンケート調査を行いました。

佐久間：アンケート調査によって、県民の意思を明らかにする。そうした客観的な数値によって、県議会に事実を明らかにしていく事にもなりましたね。浜岡原発問題の解決を図っていく上で、むしろ県民投票はいい落とし所になりますよということを、伝えていきたいと思っています。

鈴木望：私も実は同じようなことを考えているのですよ。知事にしても、そういう意識はあるのではないかと考えています。

佐久間：最後は自分が決めたくないとは、誰もが思っている。大事故になってしまった場合に、誰が責任を取れるのか。知事にしても、県議の皆さんにしても、そこは怖いんですよね。

鈴木望：だから県民投票は、今後実現する可能性は強いと私は思います。今後のために、今回の知見と経験を検証して、残しておくというのは大きな意味があると思いますね。

久保田：なるほど。そうした考えに基づいて、私たちも活動を続けていきたいと思っています。今日はどうもありがとうございました。